

葉集を読む

松岡 隆子

息ながく吐きて十月果てにけり

梶浦 道成

秋蘭の十月、秋気は更に澄み、野山は紅葉に彩られ、草木は実り、稲は収穫時を迎える。後の月を愛で、長月、菊月の風情に身を委ねているうちに、何時しか秋は深まり終わってゆく。少しづつ少しづつ、ゆっくりと息を吐きながら、秋が終わってゆく。作者自身も静かに息を吐きながら、行く秋を惜しんでいる。柔軟な感受性が捉えた〈息ながく〉の措辞がひかる。

歩きては立ち止まりては末枯るる

平沢千恵子

吹く風がだんだん冷たくなつてくると草木は色褪せはじめ枯の兆しをみせる。「末」とは「草の茎や木の幹の先端」と辞書にある。よく見ると確かに葉の先がちりちり乾びて来る。自然の微妙な変化を捉えた季語であり、詩心をそそられる。歩いて立ち止まってみても草木は末枯れるばかり。末枯

れの寂しい風の中、立ち止まると自分までも末枯れてしまいうで、また歩き出す。末枯れは行く秋の寂しさでもある。

一句消し一句あたたむ秋燈下

醍醐喜美枝

〈二句あたたむ〉がなんともよい。何度口にしても心温まる措辞である。明日の句会に備えて句帳を開く。まだ推敲の足りないもの、内容が浅いものなど、どの句もつまらなく思えてくる。でも「これは」と思う句が一句はある。(実際に二句や三句はあっただろう)。季語は動かないだろうか？調べは？語順は？と入念に見直す。胸に温めておきたい一句があることは合せだ。温める句があればこそ俳句は愉しい。

よく落ちるお不動さまの櫟の実

中谷 信子

原句は下五が〈木の実かな〉だったが〈櫟の実〉と添削した。〈櫟の実〉と名詞で止めることで〈よく落ちる〉の躍動感が生かされよう。しきりに落ちる櫟の実の音が秋晴の境内にひびく。不動尊の加護の下、櫟の実は喜んで落ちてくるようだ。〈よろこばしきりに落つる木の実かな〉の風生の句に通じる明るさがある。

五分袖は少し冷えますはがき書く

菊池 京子

九月に入っても残暑厳しい日が多く、百日紅などいづまでも咲いていたりするが、彼岸過ぎともなると夜などひんや